

浄土

monthly
JODO

12

December 2004



法然上人鑽仰会



昭和60年9月号



昭和60年10月号



昭和60年11月号



昭和60年12月号



昭和61年1月号



昭和61年2月号



昭和61年3月号



昭和61年4月号



昭和61年5月号



昭和61年6月号



昭和61年7月号



昭和61年8月号



昭和61年9月号



昭和61年10月号



昭和61年11月号



昭和61年12月号

浄土

2004/12月号 目次

特別企画 ライブラリー浄土

葦間の月影	眞野正順	2
塚田弘導上人を偲ぶ	宮澤善弘	12
会いたい人 木場勝己③	関 容子	18
響流十方	袖山榮輝	26
シネマ随想「運命を分けたザイル」	袖山榮眞	30
表紙のことば	石川忠夫	33
日本酒のことば 日本酒のじかん	藤原理加	34
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	36
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ『さっちゃんねッ』	かまちよろう	47
編集後記		48

表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎



特別企画

ライブラリー浄土

昭和11年12月号より

葦間の月影

眞野正順



(一)

このごろ、晩秋の薄い日ざしに、うつすりと庭の上を流れる白い水蒸気を、この現身の眼にうすら冷たく覚えながら、私は、書齋の上に一巻の歌集を開いていた。

うき草の生ふる渚に月かげの

ありとは　こゝに　誰れか知るらむ

これは、あの越の良寛の歌である。

その頃、すでに老齢に達していた良寛和尚は、越後國上山の奥深くに、小さな粗末な庵を結んでひとり棲んでいた。そうして時たま山を下り、食を乞うて帰るさ、野畑の道に、村の童男童女たちと無心に遊び笑みつゝ、その老いても消えぬ天真の童心を流露したのであるが、また夕日色づくと共に、獨り山路をさしてとほとほと帰ってゆくのを常とした。

おそらくもう夕暮れの途次のことであろう。山蔭の窪地に、少しばかりの水がたまつて、

葦茅などが生いているところがある。さらさらと鳴る枯葉の音に気づいて、足許を見やると、ゆくりなくも、生い茂る葦の間に、きらきらと輝きながら、天上の月の影がうごいて

いる。
思わず足をとめて、じつと見入ると、その枯れ溜まった葦の間にのこる、わずかばかりの水の面は、いまは冷たく銀のごとく輝き、煌々として天上に澄みに澄む月影をさながらにうつして、そのまゝ、寂然として静まりかえっている。

この山道の夜半に、いまは一人過ぐるものとはならない。時たま暗の中に、葦の穂をゆるがしてあるかなしかの風がまた暗のなかに消えてゆくばかり、この哀れに見捨てられたような乏しい水溜は、静かに見れば思いもかけず、今は、天上の麗わしい光をたたえ、この小さな水の面に、かの大空の壮麗なる世界は、さながら、残すところもなく込められ、その中は広く遠く、ひろびろと果てしなく澄

んでひろがつているのである。

あわれなる野路の水溜よ。汝の淋しきすがたは、また我に似ている。一目にふれず國上山の奥にちいさな草の庵を結んで、はかなく世を過ぐす我れの心と汝とは、奇しくもまた似たるかな。その姿は、世の人の眼にもかからず幽かではあるが、ここに、かの天上の月影は、おなじく冴々とやどっているのであつて、ここに目を留むる人あらば、また限りなき大空の世界をその内に見出すであらう。

思えば、それは、ただ汝れとばかり然うのではない。おしなべて世の苦艱になやむ貧しき人々の胸の底にも、また、この隈もなき天上の光は秘めてたたえられているを知らねばならぬ。

こう思いながら、茫然と良寛和尚は、その老いたる童顔を白く月影にさらしつ、いつまでも、立ちつくしていたのであらう。

x x x

良寛和尚から、すでに六百年も遡るのであ

るが、法然上人の御法語の中にも、こういう言葉が伝えられている。

『たとえば、葦のしげき池に、十五夜の月の宿りたるは、よそには月やどりたりとも見えねど、よくよく立ちより見れば、葦間をわけて宿るなる。妄念の葦はしげれども、三心の月はやどるなる』(法語抄 一〇五)

御弟子乗願のことばに依ると、故上人は、この譬喩を好まれて御法話の中にも、くりかえし用いられたと伝えられる。おなじく上人もまた、かかる月影を眺めて、しみじみと深く心に打たれ澄みわたることがあつたに相違ない。

(二)

昼間はすがれた葦の葉に埋もれて、見るかげもない路邊の蒨も、夕さりくれば、おのずから、そこに清らかな月影を宿していることが露はれてくるように、人の心もまたそうである。その外に現われる姿によって、必ずし

も、その人の内面の光を計ることはできない。

私は、よく、子供の生長などを見ながら感じるのであるが、自分の子になって見ると、子供のこの頃の挙動などには随分気にかかるような不快なことが多く現われてくる。そういう傾向のだんだん生いたってゆく将来なぞ考えていると、何とか早く、そんな性質はもみ消してしまえないものかと苛いらつてくる。そして色々と叱言こしごを言ったり手段を講じたりしてみても、それが却かえって悪い結果を招くようで、妙にひねくれたりしてくる。そんな事でいろいろしていると、何かのはずみに、一寸ちよとした局面をきつかけに、これはどうしたものか、思いもかけぬ良い性質が、急に仲々のびのびとあらわれて来て、その優しい内質に却かえってこちらが打たれてしまう事がある。こんな時の、ほっとした嬉しさの中に、つくづく思うことは、目前の挙動だけでは、その児の全体は決して極めつけてしまうことは出来ないということである。子供なぞの生長は、ちよう

ど鞠まりがころころと転がってゆくように、表を出し、裏を出ししながら絶えず変化してゆくものであるから、決して、いま出ている性質だけでは、その持つて生れた性質の全部を見ることはできない。それには、どうしても「永い眼」が必要だ。ながく辛棒しんぼうづよく、じつと、その生おい行く先までも凝視みつめて待つて深い愛の眼が必要だ。そういうものを用意していてやるのでなければ、今しきりに変化している子供は窮屈きうくつでたまらない。

よく世間で云われる、継つぎしい親子の間に起りがちな喧嘩けんかなぞも、一つはこんな処に胚胎はいたいしている事がないだろうか。先妻の子を受取った新しい母親に見れば、やはり優しく温かく、この哀れな運命の子を育ててやりたく、それがまた、自分に課せられた神聖な務むとだと、真剣になつて思っていることであろう。しかしだんだん育ててゆく間には、やはりただの無条件な優しさだけでは、却かえって、その児の将来のために悪い。時には、相当の

制御を加えて行かなければならぬことが分つてくる。そう思えば、それだけ真剣に子供の性質や挙動などを注意深く凝視する。しかし、こうしている間に、いつか、子供は常に鞫まりのごとく、ころがりながら変化するものであることを忘れてしまい、遂にただ目前に現はれる性質挙動だけで、その全部をきめてしまい、その対策を立てるようになってくる。

だが、子供がいま現わしている挙動は、その子の持つて生れた性質の全部ではない。その事は、自分が子供の時にかえて思い出して見ればよく分ることだが、子供は、絶えず表を出したり、裏を出したりしながら生長してゆくものだ。ところが、心苛あせつた親になると、ただ目前の挙止だけで、その児をきめる。ちようと、もうすっかり生長して動かぬ性格を完成した大人にでも対しているかの如き心をもって子供を見てしまう。それ故、子供になって見れば、自分

の或るとき、為した行動によって、何時までも自分が見られて窮屈でたまらない。今はそんな気がしないことでも、何時までもこだわっていられるので、いつか心がうとうとしく離れた垣かきの間にたっているような気になってくる。

そんな事で、ずいぶん真剣に、かつ強い愛情を用意して子供に對している母親でありながら、その予期とは反対の結果を、その子との間に生じてしまう事があるようである。

子供を見る眼は、どうしても、永い眼でなければならぬ。やはり、この子の何処どこかには純朗じゅんろうな美しさが、かならず秘められていてという事を見ぬき、じっと待つ「愛の確信」がなければならぬ。

愛とは、その人のどこかに秘められたる「良さ」をいつまでも確信してうごかぬ心である。

しかし、その「良さ」は、ただその人の

外面より見るならば、ほとんどその片鱗をすら認めたい事があるだろう。それは、たとえば、あの路辺の渚の野草に蔽はれた姿に似ている。佻しい枯葉に蔽はれて、道を過ぐる人の顧みることもない、その草の間にも、天上の月影は秘かに留められているように、人をその内心の奥にたずねるならば、かならず、そこには清らかな天真の光は留められているのである。それを見るものこそまことによく、人を見る眼をもつ者ということが出来るであろう。

(三)

この事は、ただに児童の上について必要なことであるだけでない。ひるがえって考えれば、この人生に人と人と共に生きてゆくための大切な結び目は、実はこの事のなかに横たわっている。

おおくの人と人とを互に堅くむすびつけて、家庭や社会をこのように結んでおる力は

一体何であろうか。その力として、人は法律や風教の力を数え上げるであらう。しかし、このような外部的な頑ななものによつてのみ、この人生社会はほんとうに結びつけられているのであろうか。

私は、法律や風教が、この社会を結ぶ大切な力をなすものである事は、充分認めているつもりである。そうして、この現代世相の頹廢をしきりと憂いて、これらのものを繰返し、主張し強説している所謂社会風教家の心中もまた充分理解し得ると思つてゐるものである。であるが――少し立ち入った事ではあるが――かかる熱心なる社会風教家のそれぞれの小さき家庭に触れて見ると、そのすべてとは云わないまでも、時に屢々、思いもかけずに親と子と妻と夫と冷たく相離れてゐるを見て驚くものである。

広く世のために憂いてやまぬ夫に、無理解なる妻と、心背くところの子女とが添うことは、むしろ人生に見出される痛ましい運命の

悲劇の一ではあらう。然し、それにしても、その数があまりにも多いことは、考へねばならぬ社会の事実ではないか。頑なな風教理論によつてだけでは、この人生は決してまことには結びつけられていないのである。

それにひきかえて、また、この社会の中には、ずいぶん風教上からはいかがはしい生活を営んでいる者の群がある。そこでは、社会道德なぞはなげ捨てられ、法律さえもしばしば犯されるような事が続き、良家の子女の平和な眼から見れば、暴々しき獣の群の蠢くを見るかのごとく感ぜられる社会ではあるが、親しく立入つて、その社会の内面に入つて見れば、その荒々しい風貌挙止の底に意外にも温い人情が優しく流れ、他には見られぬ堅い信頼で互に寄り合い、奇しき秩序を整然と営んでいるのが見出される。

これは一体何を意味しているのであらうか。

頃日、私は友人と新宿に新國劇の「掏摸の家」を見た。

場面はとある場末の長屋であるが、その貧しい人達は、そこに住んでいる掏摸庄吉の商売を知つていながら、誰もあたりまえの事のように介意しない。むしろ夫婦の氣質にみんな好意を寄せている。

庄吉は、ある日、身なりのよくない子供連れの男の懷中から掏つたのであるが、やがて、思いもかけず、その金は其人達をせつばつまつた絶望の死に追いこむものであることを知つて、狼狽した彼は、すでに手をつけた其金の不足を補うために、家財道具から女房の身のまわりまで洗いざらい売つてしまい、詭えた鰻飯まで折詰にして、飛ぶように上野駅に馳けてゆく。

ところが、その掏られた主に返している場面を目ざとく見つけた新聞記者は、慈善家と間違ひして庄吉を追いまわすので、庄吉は警察の手がまわつたと早合点して、長屋の人

達に別れをおしみながら、夫婦して夜逃げをしてしまふ。

すこし喜劇じみた、微苦笑を誘うものではあるが、その顔つきの凄いのひきかえて心のひどく清らかな主人公やその氣質に二もなく其妻、二人の心の優しさにひかれてゐる長屋の人達。これが醸しだす。特有の清らかな情景には、見ている觀衆の胸の底に、何かなし迫ってくるところのつよい「真実」がこもっていた。

掬摸の悪は悪であるけれども、ここではそれが、どこかに浮き上つてしまつて、その裏に秘められた優しい人情の流れだけが、きらきらと澄み輝いている。庄吉の「悪」は、むしろ同じ処に住む貧しいマツチ張や、声色遣い達と同じように、それぞれが肩に擔う生活苦をしのぐ道としてだけにしか感ぜられていない。その職業の悪も、性癖のゆがみも、はたまた醜惡なる風貌も、かの人達にとつては、むしろ、それぞれが仕方なく背負つて来たこ

の世の「運命」でしかない。その重くかつ醜い「運命の荷」の蔭から互に掌を伸べあつて、ひしと握りしめてゐる。それが彼等の世界なのである。

葦間にうつる清き月影を見入つてみれば、其処に立つ黒く乱れた葦の姿は、いつか眼から消え去つて、たゞ煌々たる光の世界のみ深く遠く見えるだけであらう。その如く、彼等の醜き風貌と行為も、その蔭に秘かにたたえられる美しい光を互に認め互に見入るとき、おのずから、消え去つて、純なる人情の諧和がここに露われてくるのである。すなわち、彼等は、互の裡なる月影を、互に見入り見合ふことによつて、ここに奇しくも温かい信頼の世界を堅く形成してゐるのである。

現われる外形のみによつて、其の人を定めることは不可能である。自らでさえ、この転変絶え間のない一生の行路に、何時か、その道を蹉跌することなきを保することが出来

(四)

ようか。すでに誤つてその道を踏み外し、世の冷たい白眼をその世に浴びて、我がつたなき運命を泣く者の心にさしてくる暖かい光はどこから来るであろうか。それは、この我が外形を見る者の中にはない。この拙なき我身の内面にひそめられたる月影を見、かつ信じてくれる者だけにしかない。

さればこそ、刑にあえる盗人をまことに悔悟せしむるものは、その内心を信じて動かぬ優しき妻の心根であつた。失意に堕ちたる友人をして再び奮起せしむるものは、その真実の信友であつた。自棄して凶暴におちいれる子を再び泣かしむるものは、また我子を信じてやまぬ老母の膝ではなかつたか。まこと、あらゆる転変を越えて、人を人とし、真に生かし、かつ結ぶものは、常にかくの如くかくれたる内面の月影を見、かつ信ずる心の外にない。

この社会にあつて、その人の胸が、底まで冷え凝固つて、光の片影をさえ、そこに留めぬ粗鉄のごとき人が、もし在りとするならば、其人は遂に救ひ無き人であらう。然しながら、かかる人は実には存しない。かくては、生きて行けないからである。

人の心の奥底をさぐり来れば、かならず、そこに気高き光が幽けく柔かく瞬いている。しかしこの事を、人は我身に於てはたやすく領くのであるが、他人を見る眼に於ては、しばしばこれを曇らし勝ちである。日々の交渉葛藤のまにまに一時の行掛りに躓いて、遂にその人の本然を見失ふことは余りにも我等に多い。そうして故もなき怨恨や憎悪をいたすらに我等の間に捲き起こしてしまうのである。まこと人を見る眼は、その外形によつて裁くところの「智」でなくて、見えざるを見るところの「信」でなければならぬ。人と人との

結合が「信頼」に根ざさねばならなかったように、人をまことに見るものはあらゆる外形の行掛りを越えて、直ちにその人の内面の純光に直参（じきさん）するところの「信の眼（まなこ）」でなければならぬ。

眞実の生活の基礎は信である。

かくて、我等はいつか宗教の門にと辿り（たど）ついているのである。

宗教とは、あらゆる外形をはねのけて、かかる月影の中に、この身を投げ入れ、輝くその流れに全身をひたらせて行くことである。すなわち、光の中において、この人生を見るものである。

唐（とう）の善導（ぜんどう）和尚は、信仰者の生活規範を簡潔に言い放たれた。

『慈心をもて相ひ向ひ。仏眼もて相ひ看る』
仏の眼とは、やがて、この光において見る
ことである。すなわち、互の胸の奥底に湛（た）え
られたる限（かぎ）なき仏光を、互に見交（あ）しつゝ睦（む）

み合（あ）つてゆく生活である。

宇内（うない）に満つる輝やく仏光を信受する者は、やがて世の諸々（しよしよ）の人々の奥にすでに深く照らされているが、その光を見逃すことはないであらう。かかる光の中より見れば、ここにいる我等はそのそれぞれの身を以てかの崇（たか）き天上の月影を蔵（くら）むところの渚（さ）である。

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ（法語抄二六〇）

内（うち）につつむところの月影を、その人それぞれの境遇と運命との姿の中に、さまざまに瞬き輝かしてゆく、それがこの人生の実相である。世は畢竟（ひつぎやう）、人間それぞれが互いにその胸に分ら与へられたる清き光を中心として、さまざまの姿にその生活相を織りなしてゆく、限りなく、かつ壮麗なる一絵図ではないか。

静かに味（あじ）えば、今更（いまさら）に、この一首にこもる意味のかぎりなき深さに打たれるのみである。

晴雲寺第十九世
大本山光明寺顧問会長

塚田弘導上人を偲ぶ

大本山光明寺前執事長

宮澤善弘



上人のご足跡

神奈川県平塚市の名刹「晴雲寺」さん、正式名称「松風山光照院晴雲寺」から聞こえてくるのは波の音、寄せては返す大波小波は相模灘がみなたです。晴れた日は美しい砂浜、延々と続く松原、光差す穏やかな浜辺ですが、一度黒風荒れる日ともなれば逆巻く怒涛どとうと化す。そんな自然の景観が彷彿ほうふつとして脳裏に浮かびます。因みに当寺の起立は天正年間と伝えられ、在りし日は、今のJRR平塚駅の辺りに所在と聞きますがそうだとすれば東海道平塚の宿で往来旅人の誰かがこの寺号の由来を尋ねたかもしれません。

第二次大戦終戦の間際、昭和二十（一九四五）年七月の大空襲で堂宇焼失し現在地に移転したと聞いています。

平成十四（二〇〇二）年十一月のご当山発刊『浄土宗松風山光照院晴雲寺・弘導上人足

跡』は、上人の白壽を記念してのもので「発刊にあたり」序文の末尾に次の記述があります。

「（前略）以来、七五年余を現職住職として宗門の発展、檀家の心の拠り所として尽力す、就中、晴雲寺住職としては、昭和三十一年より四六年の永きを数える。今日ここに、白壽を迎えられ檀信徒こそぞって慶賀申し上げる次第である。

この機会に住職坐像を贈るとともに足跡を編纂することとした。（上野役員記）」とあります。

そうして本年、平成十六（二〇〇四）年六月十日法壽百一歳をもって御遷化を迎えられたのであります。

宣蓮社正譽法阿實相弘導大和尚

上人のご足跡は前記の冊子に詳述されており、その年譜を拝見すると、暦年三十五項に亘って記述されております。

上人のご事跡を詳細にお偲び申し上げて記述するとなれば大変膨大となり、資料等をふくめると優に大巻の書籍をもってしても余りある量となります。

今は前述の要約小冊子が晴雲寺様に所在することのご紹介に止め、最後に上人坐像のことについて前記冊子の記述を付記します。

冊子「あとがき」の抜粋

「今日、ご壮健で『白壽』を迎えられたことは檀信徒の慶びで衷心より慶賀申し上げます。

役員会議を重ね、この機会に『中興』称号の趣旨、晴雲寺復興隆昌の功績に対して感謝の誠を捧げ、併せて『白壽』を寿ぎ将来に残る『寺宝』として住職坐像の制作と『足跡』発行を決議した。

坐像は、一昨年「阿弥陀如来像」修復を手がけた本間紀男工學博士に発注。天平の脱乾漆技法（唐招提寺の鑑真和上像）で、制作に

入り一ヶ年の歳月を費やし完成の運びとなった。」とあります。

上人ご履歴の摘要

一、住職歴 四ヶ寺

阿弥陀寺（戸山・大15）・涅槃寺（神奈川・昭4）

専念寺（神奈川・昭6）・晴雲寺（神奈川・昭33）

兼務住職 大楽寺・晴雲寺・薬王寺

二、総大本山・宗内・宗外役職

総本山知恩院おてつき運動代議員

善導大師遠忌左導師・宿老

大本山光明寺開山遠忌七百年奉賛

会長

協議員会会長・石井法主葬儀委員長

顧問会会長・十夜唱導師・蒨職

神奈川教区

教区会議長・等級審査委員・教区議

員

組長・分団長

宗外

少年保護司・民生児童委員・神奈川

仏教会常任理事並びに全副会長及び

顧問神奈川県宗教連盟理事

地域小中高等学校PTA副会長

地域自治会関係・その他

三、寺門興隆

本堂新築（昭33）客間及び庫裏新築

（昭35）講堂新築（昭55）

客殿・庫裏・山門新築（昭和62）

境内地造園・門前駐車場・他

上人を偲ぶ

大変革を目指した大本山光明寺は、近年に及びにわかに打合せやら会議やらが増え、行事なども頻繁に行われました。

顧問会長という重責を負うて、招請ある時は平塚のご自坊より貸切りタクシーで必ずご

平成十四年（二〇〇二）十一月

『浄土宗松風山光照院晴雲寺』

弘導上人足跡



平塚市立野町六番五号晴雲寺住職

第十九世 正譽

出席になられました。

今にして思えば齢九十に近いご高齢であられた訳です。ご健勝（嬰鏢）とお見受けしたご容姿やら、また、明晰な判断力や頭脳の回転を目の当りにして、私達はいや私は、上人のお身体にどれ程の負担をお掛け申していたのか、そう考えると慙愧の涙に耐えません。

平成十五年五月に光明寺を辞した私は、その後体調をくずして歩行不如意に悩まされ、ついでお会いすることもなく今日に至っております。

元気になって早くお礼とご挨拶に伺わなくてはと思いつつ、それができないもどかしさをかこつ日々、その内に上人ご遷化の報に接しました。

ご恩を受けた上人のご表葬にさえも出席できず、光明寺前任執事長の北邨謙順師にお願いしてお焼香をして頂くという不義理を重ね真に申し訳なく思っております。

北邨師の名を出した序に申し上げますが、本山執事総務部長の時、北邨執事長に伴われよく教区外の長老上人方をお訪ねしました。

大きな問題、重大な決意を表明すべき事案のある時は、前もって長老の意向を確かめる。これは師の常套手法で、本山本坊・書院再建の大業を果たされました。私はその手法を踏

襲し、塚田上人お一人に依存いたしました。

平成七（一九九五）年、執事長を拝命した私は予て意中であつた光明寺外観の刷新、内容を含めての総合的よみがえりの達成を自己の使命と位置づけしました。そうして、この大望を引上げ、顧問会長塚田上人をお訪ねし、色々なお話を申し上げた中でこのことに触れましたら、それまで穏やかに聞いておられた上人が急に改まった表情を向けられて「何」とおっしゃいました。「色々な人が色々なその事を言つて幾年にもなる。そして終ぞ果たせず今日に至る。執事長として軽々しく口に出すべきでない」

こう上人のお口から伺つた私は、驚きかつ不用意に世間話の様に話した自の愚しさをかみ締めて帰つて来たことを思い出します。

悔しい思いを取り戻すには具体的計画としてお示しする外はないと気付き、日ならずそれを持つて再度お訪ねする機会を頂きまし

た。

今日すべての目的を達成し、輪奐^{りんかん}一新、美しく建ち上った本山の偉容を目にして、決して忘れることのできない塚田上人のご助言が思い出されます。

その二、三をかき摘まんで述べるといたしますと、

- 一、事業計画の発動は今（平成八年）が好期。一刻も早く取り掛かるべきである。
- 二、開山堂建設費は全国募財で行うこと。
- 三、開山堂再建の理由は、老朽・危険を前面に掲げて一貫すること。
- 四、特に内局の結束。仲間割れは絶対に避けること。

等々でありました。

上人をお偲び申し上げるといっても、私が上人の直接のご指導を頂いたのは、前に述べた様に平成七年度から十四年度の間であり、しかも内容は光明寺に関するものと限られた

ものでありました。その意味では非常に片寄ったお話にならざるを得ない訳であります。しかし、光明寺の再建というのは浄土宗一宗に関わる大事であって、その仕事を進める責任者の心構えや事業推進の方針等の根底をお支え下さったということは偉大でありました。

特に事業実施の時期についての試みは最もたるものであったと思います。

最後に、ご老体の上人を色々とお煩わせ申したこの間において、晴雲寺副住職塚田勝晃上人はじめ寺門ご一統には大変ご心配をお掛けしたことを思います。

どうか晴雲寺お檀家の皆様には、ご住職塚田弘導上人の以上の至上なるご行績を誇りとされ、長く歴史にお留めくださるようお願い申し上げます。

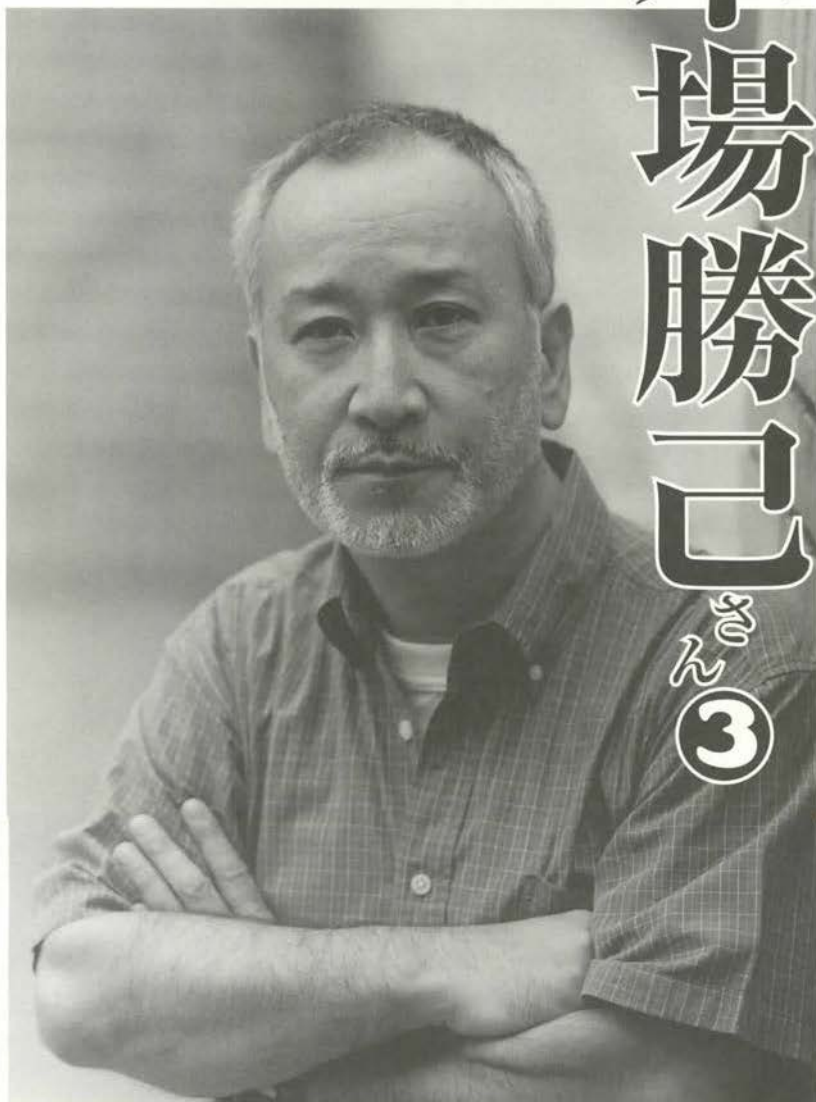
以上

連載

会いたい人
関 容子

木場勝己さん

③



俳優にとつて、電車の中は人間観察の宝庫だと木場さんは言う。

「アルバイト時代からよく見て歩いてました。俳優には二通りあると思うけど、吊皮に止まって今自分がどういう形でいけば見栄えがいいだろう、と考えるのと、ここにはどういう人たちが集つてゐるのか、とキョロキョロするのと。ぼくはもちろん後者のほう。人間に興味があるんですね。たとえば自分の降りる駅と似たような駅が見えて、パツと立つちやつてドアまで行つたら違つたというときに、座席からドアまで歩いた自分をどうやって消したらいいだろうか、と思うと、たいていの人は用もなく腕の時計を見ますね、照れかくしに（笑）。またあるとき電車の中で役者の芸批判をずうーっと一人でしゃべり続ける中年の男がいました。明治座を観てきた人で、浜町から乗ってきたんですけど、あたかも目の前に話す相手がいるかのようにしゃべり続ける。あんまり面白いんで、電車を乗り

過して、ずっとついていたこともありますよ」
木場さんの初舞台は昭和四十五年、養成所時代に出演した『泥棒論語』（花田清輝）。

「当時の文化人にあてはめられた人物がたくさん登場する諷刺精神に満ちたもので、ぼくは沢の太郎という岡本太郎を彷彿とさせるような役でした。ちょうど小道具の鎧をみんなで作っているときに、三島由紀夫さんの割腹事件が報じられたので、すごく印象に残ってますね」

養成所を卒業すると同時に大学も中退する。

「この時、ドイツ文学の岩淵達治さんと「B・B」という集団を作ったんです。ブレヒトの芝居を二本やっただけです。柄じゃないと思つたんでしょうね、すぐ別れました」

その後、蜷川幸雄やのちには竹内統一郎と一緒に演劇活動がかなり続くが、木場さんが演劇界にこの人ありと認められるようになったのは、やはり四十代になって、TPT（シ



テレビドラマでも活躍する

アタープロジェクト東京)の旗揚げ公演『テレーズ・ラカン』(ソラ)に参加し、成功したことによるだろう。

「その前にかなりいろんなことをやってました。テレビの『銭形平次』では風間杜夫さんが銭形の親分、ぼくがガラッハというコンビでずいぶん続きましたし、安部譲二さんの『塀の中の懲りない面々』のシリーズにもレギュラー出演してましたから」

テレビの仕事をしていても、相変わらず木場さんの人間観察は続いている。

『『塀の中』は刑務所の中の話ですから、みんな坊主頭で同じ囚人服を着て、現場には男っきやいなかったもんで、だんだんと仲間意識が生じてくるんですね。殿山泰二さんはいつもじつと座ってて何もしゃべらないんですけど、みんなが相当疲れてくると、ボツリと面白いことを言ったりする。この間、NHK行ったらね、年寄りのくせにGパンなんかはいたやつがこっちへ向ってスタスタ歩いて

きて、いきなりガンとぶつかった、と思った
ら鏡だった(笑) って。みんな笑うんだけど、
自分は笑わないんですよ」

このドラマで、木場さんの「究極のアドリ
ブ」がみごとに決まったとか。

「安部さんらしき人物に扮するのは渡瀬恒
彦なんです、刑務所にいても読みたい本の
希望を書いて出しくとワゴンが廻ってきて
貸してくれるシステムがあるんですよ。で、
彼はテネシー・ウィリアムズの戯曲を頼んで
たのを、ないって断られたんですね。すると
ぼくが慰め顔でいうんです。『安部さん残念
でした。ね。ぼくも大好きなんです、江利チ
エミのテネシー・ワルツ……』(笑)。みんな
大吹きになりましたよ」

舞台俳優としての木場さんに大きな転機を
もたらししたのは、前述した『テレーズ・ラカ
ン』ほか何作品かで、イギリス人の演出家デ
ヴィッド・ルヴォーと出会ったこと。

「彼の演出の中で、日本のいわゆる新劇の
人たちがどうやって失敗してきたのかがわか
った気がします。日本の新劇は左翼的な色合
いを帯びてずっと来ましたから、たとえばゾ
ラやイブセンだと、女はいつも悲惨な目に遭
つてるとか、社会から見捨てられてるとか、
テーマ主義的になってしまつて、そういう内
容をきちんと言うことばかりに気持が行つて
しまふんですね。しかしデヴィッドは、その
言葉で相手に働きかけること、何をもちらし
たいのかが重要だ、って言うんです。まあ、
日本語わからないせいもあるけど(笑)、台
詞を一字一句間違えずに言うことよりも、そ
の台詞で今何を訴えたいのか、どうしたいの
か、が優先されなきゃいけない。それを具体
的にノーハウとしてほくに植えつけてくれた
のがデヴィッドでした」

なるほど、うまい歌手が歌えば外国語の歌
がより強くその心を伝えることがあるように、
外国人演出家は日本の俳優の台詞にどの

くらい深い精神性が含まれているか、よくわかるのかも知れない。

「どうやって彼にそれがわかるのか最初は謎でしたけど、あとでわかりました。つまりわれわれが台詞をしゃべり出したときじやなくて、しゃべる前の身体を見てたんですね。相手役がぼくに語りかけるときに、それをこっちがどう受けとったかというのを見逃さない。そのリアクションが嘘だと、いくら台詞でそれらしいことを言っても認めないんですよ。受けてるときのこっちの身体を彼はジャッジしてたわけですね」

静かな声なのに木場さんの台詞が客席に強く働きかけてくる理由の一端がわかった。それにしても、深々とした精神面を感じさせるあの声のコントロールはどうやって獲ち得たものなのか。

「昔、初期の蜷川さんの芝居に出てたところはぼくも絶叫調で、声を枯らしてましたよ（笑）。あのころみんな台詞は早口で大きな声

で叫ぶというのが全体的なトーンとしてあって、それはきれいな整った発声への反感でもあったんだと思うんです。音楽で言えばロックですね。世界に向って自分の思いを最大ボリュームで叫ぶんです。すると身体がもたなくて声は枯れますよ。そしたらあるとき、自分が聞いてやだなと思うような声、自分で聞きたい？ と誰かが言って、ああそうかと思っただけです。それから台詞の吐（気持）と声のボリュームの試行錯誤ですよ。自分に存在する力があれば、囁いたって通じるよ、叫ばなくとも届くだろう、ということでしょうね」

木場さんのめざすきめ細やかに心の通う演劇に、まさにお誂え向きだったのが隅田川左岸にある、百五十席に満たない小劇場のベニサン・ピット。『エリーザと海の夫人』（イブセン）や『ヘッダ・ガブラー』（イブセン）『背信』（ピンター）などで、佐藤オリエと連



木場勝己プロデュース第1回『今は昔、栄養映画館』で、すまけいと共演（1998年）

続共演した。

「いい女優さんで、この間『太鼓たたいて笛吹いて』（井上ひさし）で共演した大竹しのぶちゃんにも感じたことですけど、自分の中に二人の人間を置くんですね。その二人を葛藤させて、たとえば悲しい表現のところは泣きたい人間と、泣くまいとする人間が戦ってる、ということをやるわけです。さすがにうまいなあと思うと同時に、一回、それを全部はずして、素手でこっちの芝居と丁々発止と渡り合ってもらえたら、もっと燃えるんじゃないか、と思ったりすることもあるんです」

さて、TPPへの連続出演がキッカケとなつて、新藤兼人監督の声がかかり、映画『午後の遺言状』にも出演した。

「新藤夫人の乙羽信子さんがそのころもう癌に侵されている、ということ聞かされてシヨックでしたけど、乙羽さんは極めて明るく自然に振舞っておられました。おかしかつたのは共演の杉村春子さんで、待ち時間はま

るで置き物みたいにじーっとしてて動かないんです。それが撮影となるとびっくりするほど女性になっちゃう（笑）。振り向いたりされるとドキツとするほど色っぽいんです。自分では決して老人だと思つてないんですね。ぼくの役はちよつと頭のいかれた脱獄囚ですから、台詞は乱暴ですよ。そしたら、ねえ、ババアって呼ばないでよ、つてリハーサルでほんとに向きになるんです。すると監督がぼくを陰に呼んで、だつて正真正銘のババアじゃないか、つて台詞を付け足されたんです。それで仕方なく本番でそう言いましたよ。相手は一瞬詰まつたけど、例の甲高い調子で、アアそうですか、つて（笑）。杉村さんはあれほどたくさん出た映画の中でババアと呼ばれたことは一度もなかったそうなんです。その昔、ぼくが小津映画の一観客だったころ、あんなに敬愛していた杉村さんに対して申し訳ないことをしました。でも新藤さんとは言え、声を出さずに身体をゆすつて笑つてま

したけどね」

ところで、芸城の広い木場さんだが、今年の夏にお笑いの吉本所属の劇作家後藤ひろひとの『MIDSUMMER CARNOLーガマ王子VSザリガ二魔人』という芝居に出ると聞いたときは、ちょっと驚いた。

「声をかけてもらうと、そこにぼくを必要としてくれるのかと思って、断れないんですよ。ぼくは吉本の芝居が好きで、大阪へ行くときよく観てるんです。たいていは他愛もないものなんだけど、芸人さんがときどき本気になる瞬間があつて、本気と言つてもお笑いの乗りですけどね、そういうときは、あ、すごいものを観たな、と思う。それで今回の誘いにも乗る気になったんです」

その不思議なタイトルの芝居は、病院の中で繰り広げられる医師と看護士と患者たちの「感動の爆笑ファンタジー」というふれ込みだった。爆笑しながらどう感動するのか、といふかりながら観に行つたが、思ったよりも

ずつとまともで、木場さん扮する頑固老人が難病の少女と心が通じる場面は素直に感動させられた。

「一幕の終りでもう心が通い合つちゃうのは早すぎるんですが、それはまあぼくの役が主役じゃないからなんです。あの芝居の劇構造は、主人公が悲惨な目に遭つて、それまで回りにいて何でもなかったような人物が遠くからその主人公のことを気にかけて、あるとき助け舟を出すと主人公が喜ぶ。その瞬間に観客は泣くんだな、と思いました。『おしん』にしてもそうでしょう。これが世界共通の芝居のツボ（急所）なんでしょうね」

木場さんには今後いろいろなジャンルに果敢に挑み続けてもらいたいが、名作と言われる次の三つも木場さん主役では非観てみたい。それは、『シラノ・ド・ベルジュラック』、『ワーニャ伯父さん』、『セールスマンの死』……名舞台になるだろう。

（おわり）

返すゝも本願をとりつめまいらせて、一念もうたごう御こころなく、一声も南無阿弥陀仏と申せば、わが身はたとい何に罪ふかくとも、仏の願力によりて、一定往生するぞとおぼしめして、よくよくひとすぢにお念仏の候べきなり。

法然上人【正如房へつかはす御文】

阿弥陀さまの本願にしっかりと抱きすがって、少しも疑うことなくたえわずか一声でも南無阿弥陀仏とお称えになれば、どんなに罪深い我が身であつても、本願のお力によって必ず往生することができるのだと思い定め、ひとすぢにお念仏の道を歩まれて下さい。

ひとすぢがよし

もろもろの事象は消え去る性質のものである。

怠ることなく、修行するがよい。

この言葉は『サニユッタ・ニカーヤ』（相応部經典）や『マハーパリニッパーナ・スッタ Tantra』（大般涅槃經）に伝えられる釈尊の遺言である。「もろもろの事象は消え去る」とは諸行無常のこと。この世の無常を痛感すればこそ釈尊は出家を志した。仏教の出発点はまさしくそこにあるのだが、たとえば『平家物語』の冒頭に、

祇園精舎の鐘の聲　諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色　盛者必衰の理をあらわす

と語られている。

そのせいだろうか、筆者などは諸行無常＝盛者必衰、あるいは生者必滅との印象を抱き、無常が無情と混線してしまうのだ。

しかし、大切なのは「怠ることなく、修行するがよい」という後半部分。諸行無常だからこそ修行を怠るな。そこを忘れてしまつては、仏教を単なる虚無的な教えと理解するしかない。

十一月も間近に迫ったある日、拙寺本堂の前庭に一本だけ植えている山茶花が開花した。たった一輪ではあるが、大きく黄色な花心に暖かなピンク色の花びら。もちろん、それが毎年のことというのであれば何の変哲もない話である。ところがこの山茶花、苗木で植えてから九年目にしようやく花を咲かせたのである。

例年、蕾はつけてきた。しかし、花を開かせぬまま朽ち果てるというのの繰り返し。今年もダメなのだろうか、と氣を揉んでいた矢先のことだった。はじめ大人の腿ほどの高さであった苗木が、いつの間にか人の胸の高さまで背を伸ばした。蕾を抱き、花咲かすだけの養分を吸い上げる力が備わったのだろう。

付けては朽ちる蕾に無情を覚えていたのは人間の側だけで、山茶花の方は黙々と地中での準備を重ねていたのだ。

さて、正如房である。彼女の正体が式子内親王であるかどうかは興味が尽きないが、ともかく彼女は臨終の床から法然上人に、最後を迎えて心が乱れぬよう看取って欲しいと手紙をしたためた。冒頭の言葉はそれ

に對する上人のご返事の一部だ。

諸行無常はこの世の定めである。時として人は災難に遭い、病を得たりする。罪深く振舞うこともあれば、心も乱れる。しかし、病に苦しもうが、罪深くなろうが、あるいは心乱れるままに臨終を迎えようが、いつ何時でもひとすじにお念仏を称える。それこそ無常の世にうろたえざるを得ない私たち凡夫が、唯一救われる道であると法然上人は受け止められたのである。

何が起ころうと、どんな目に遭おうと、なすべきことを怠らない。拙寺の山茶花も、そうして花を咲かせたのだらう。山茶花ではないが、先日、こんな句に出会った。

生きることは一と筋がよし寒椿 平の助

天変地異におののいた今年、我が身に置き換えて味わいたい。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

「運命を分けたザイル」

監督 ケヴィン・マクドナルド

原作『死のクレバス アンデス氷壁の遭難』

(岩波現代文庫)

軍国少年たりしころ、現インドネシア・スマトラ島のバレンバン飛行場にパラシュート降下を敢行した「落下傘部隊」のニュース映画に、胸を躍らせつつも気になる事があった。

モノクロだから「藍より青き」かどうか定かではないが、ともかく晴れた大空を背景に無数のくらげのように群がり降下するパラシュート部隊の勇姿を、地上から仰角で撮影したのは誰か？ との疑念に悩まされたのである。国民学校訓導先生のご託宣では「帝国陸軍の神兵たるものカメラ操



作など朝飯前」とあったが、実は当時のニュース映画界にこの人ありと知られた、本間金資カメラマンが先発の兵士たちと共に初体験の降下を買って出た成果なのだと知って、「さもありなん」と胸に落ちる、プロの映像だった。

本間カメラマン撮影のシーンの中に、今も時折放映されるのが、昭和一八年一〇月一八日、明治神宮競技場における「出陣学徒壮行会」の光景で、中でも「グラウンドの水溜りに映る出陣学徒隊」の悲壮美は決して色褪せることなき鮮烈なるインパクトを誇っているが、撮影者の回顧談によれば当時のカメラは非常に重く、構えている肘が知らぬ間に下がってしまい、偶然レンズに飛び込んだきた被写体が、水鏡の中の青年たちだったという。あれから六〇年、カメラの性能の飛躍的進歩と軽量化を以ってしても、山岳カメラマンの作業は時として登山家、もしくは俳優以上の労苦を免れないものであるが、『運命を分けたザイル』演出撮影に当って「冒険家が好む過激な場所での撮影を得意とする」ブライアン・キールを特に専門家として迎えたマクドナルド監督の細かな配慮の

賜物として供される、ペルー・アンデス、シウラ・グランデ峰をめぐる秘境のグロテスクなまでの自然美の荘厳さに触れるだけでも一見に値する、この映画のストーリーを先ず紹介しよう。

サイモンとジョーという野心に溢れるイギリス生まれの山男二人が、前人未踏のシウラ・グランデ西壁アタックには成功するが、下山の稜線からジョーが滑落、右足骨折の重傷を負う。山男ならではの知力と体力の共同が功を奏するやに期待されたが、再度ジョーが滑落、しかも宙吊りという最悪の事態を招く。二人を繋ぐ一本のザイルが、両者を救うか、両者を死に導くか、一人だけを生存させるか。ジョーは沈着冷静に第一の確立をゼ口、第二を一〇〇と判断し、ザイルを切断する。『運命を分けたザイル』との邦題は、ジョーの決断が結果的には両者を救うことになるとの暗示であろう。

転落したジョーが、直下のクレバスの氷壁から突き出た棚状の氷塊に着地するという幸運からストーリーは極限状態に置かれた人間の、生存のための崇高なる悪戦苦闘の精密描写に転調するのだ

が、実は驚くべきことに、この「ストーリー」全体は「実話」であり、映画化に際してマクドナルド監督の選択したプロットの構成そのものが、この「ドキュメンタリー・ドラマ」を特徴づける。

俳優の演ずるジョーとサイモンと、実在人物のジョーとサイモンとの両方を画面に登場させる——これがこの映画の特異性である。(もう一人、ベース・キャンプの留守役、リチャードについても同じ) 実在人物たちの撮影はロンドンのスタジオで、ごくカジュアルな雰囲気で作られる。面塊を比較するならば、とても山男とは思われないのが実在人物のほうなのだ。つまり極めて非日常的の世界でのストーリーが、極めて日常的世界から語られている。

俳優の演ずるジョーなりサイモンなりに感情移入して、彼らの一挙手一投足にハラハラドキドキしたがる観客の心情にブレイキをかけるのが実在人物たちの存在感なのだ。たとえばザイルが切断されるとき、ジョーと共に死を覚悟しようとして、生き証人たる実在のジョーは「死ななかつた」

ことの動かぬ証拠となる。ハラハラドキドキに目が眩んで、見落としてしまう「強靱なる人間性の尊厳」に目を開かせるのが、ヒューマン・ドキュメントの真骨頂なのだ。

皮肉なことに、この映画の圧巻というべき場面は雪とも氷とも氷壁とも無縁の、ガレ場を舞台に展開する。片足を骨折した人間にとって、氷と雪の領域は腹這い前進可能な、好条件に恵まれていたのだ。大小さまざまな岩石が散乱するばかりのガレ場を如何に進むのか。かれは右手に握ったピッケルを杖に左足に重心を移しつつ立ちあがる。役に立たぬ右足を前方に出し、ピッケルに全体重を託して左足で跳ぶ。一〇センチほどの「前進」であり、チベットの巡礼の五体投地さながらに倒れ伏すことも稀ではない。前方に目標を定めて二十分で到達しようとする「二十分の挑戦」を重ねること二昼夜、生還を果たした俳優の惨憺たる面貌に、実在人物の平々凡々たる笑顔を重ね合わせる、更めて「人間性の尊厳」に衿を正さざるを得ない。

表紙のことは

12
月

知恩院 除夜の鐘

浄土宗総本山知恩院の鐘は日本三大梵鐘（知恩院・方広寺・東大寺）の一つ。大晦日の除夜の鐘が近づくころ、試し撞きがなされる。雪がちらつくような師走末、撞木から延びる一本の親綱を担う僧侶が、子綱を持つ十六人とともに「え〜い、ひと〜つ」「そ〜れ」の掛け声に合わせて全体重を綱にかけ、宙に体をのけぞらすようにして鐘を撞く。僧侶が渾身の力で撞木を突くたびに、重厚な音色が東山にこだまする。

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

日本酒の杜氏

その三
杜氏

今年も、はや師走。日本酒においては、いよいよ「仕込み」の季節の到来です。一冬毎の、やり直しのきかない真剣勝負。そんな厳しい仕込みの現場で、多くの蔵人さんを統率し、自分の造りたいお酒のイメージ味の設計図に基き、すべての工程を考え、監督・実行するのが「杜氏」（とうじ）さん。さらに名杜氏さんともなると、「麴の出す香り、酵母の立てる音まできき分けて」、発酵の進み具合や、出来の良し悪しをさえ感じ取るといわれます。まさに日本酒好きにとっては、ありがたく尊敬すべき匠が杜氏さんなのです。ところで先日、そんな大役を担って、おいしいお酒造りに励んでいる素敵な女性にお会いしました。工藤華子さん。彼女は、秋田県平鹿郡にある「舞鶴酒造」の取締役（つまり跡取り娘さん）であり、全国的にも珍しい女性杜氏さんでもあります。でも、なぜ華子さんは、女性にとつてはまだまだ環境的にも厳しい杜氏さんの道を選んだのでしょうか。

「私は2人姉妹の長女で、小さい頃から、この蔵はあなたが継ぐのよ」と言われて育ちました。でも、もちろん、その頃は少しは反発もあったんですよ（笑）。それが、東京農大で醸造学を学んでいるうちに、その面白さに目覚めてしまった。何よりも、麴菌や酵母など、目に見えない微生物がすべてを決めるといっても過言ではない仕込みの、その不思議な世界に魅了されてしまったんですね。それで、蔵の経営をする「蔵元」という仕事を引き継ぐだけではなく、現場では杜氏として、自分の思いを込めたお酒を造りたい、造ろうって決心したんです」

そんな華子さんの昨冬の自信作をいただきました。秋田産の美山錦という酒米を55%まで精米し（磨き）、「13BY」という酵母を使って「山廃仕込み」をした、山廃純米吟醸酒「田人人」（たびと）。爽やかで飲みやすいのに、ふっくらと豊かな旨みの広がりもあって。この日のお肴、とれとれの戻り鰯の刺身や、



藤原理加

○取材協力／東京・四谷「萬屋おかげさん」主人・神崎康敏氏
○舞鶴酒造株式会社 製造管理責任者／取締役 工藤華子氏

ハタハタの塩焼きなどにもよく合います。華子さんの造るお酒のファンの人達と共に開んだ食卓の上の一升瓶は、あつという間に空っぽになってしまいました。

「私のイメージの中では、お酒は常に食卓と一緒にあるんですね。だから、私が造りたいお酒というのは、お米の味がちゃんとして、旨味があつて、しかも食中酒として、ごくごく普通に飲めるお酒なんですよ」

と、華子さんが願う通り、田人人は、まさにそんなお酒でありました。そして、この冬もまた、華子さんはその魂を込めて、目に見えない微生物が醸し出す不思議な世界「仕込み」に挑みます。

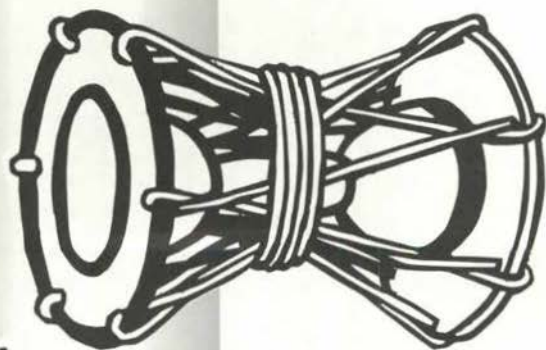
「どうやら、うちの蔵は、酸が出やすい癖があるみたいなんです。つまり、うちの家付き酵母（もともと蔵に生息している野生酵母。一九〇五年に酵母の培養方法が確立されるまでは、どの蔵もこの野生酵母だけで仕込んでいた）が、そういう癖を持っているみたいで、

だから、その野生酵母にどういった酵母を組み合わせれば、自分が設計した通りの、イメージ通りのお酒になるのか。今年もまた、いろいろな酵母や造りを研究して挑戦したいと思っています。失敗したら大変というプレッシャーは人一倍ありますが、だからこそ魂も入るし、イメージ通りのお酒が出来たときの喜びはひとしおなんです」

今からおおよそ千年前、平安時代にはすでに確立していたという日本酒の製造技術。「世界一複雑で難しい」とも評されるその高い技術は、江戸時代以降、丹波杜氏、越後杜氏、南部杜氏の「三大杜氏」をはじめとする全国各地の杜氏集団に守られ、継承されてきました。さらに、最近では、そんな伝統的な日本酒の匠の世界に、華子さんのようなフレッシュな人材もどんどん加わってきて。来年の新酒の出来が、ますます楽しみになる、素敵な出会いとなりました。

法然上人を
めぐる人々

一の谷



中
いし方

◆第十二回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫

(十九)

当時、相手に名乗りを求めるときには、まず自分の名を名乗るのが礼儀であつた。

「汝は誰ぞ」と訊ねた若武者の心には、名乗りあうべき相手か否かを確かめず、軽々しく自分を明かすことはできないという思いがよぎつたのであろうが、今、この若武者は直実に組み敷かれ、首を切られるか、助けられるかの瀬戸際にいるのである。

並みの人間であれば、命惜しさに、お助けいたしましょうといわれれば、名乗りあう際の武士同士の礼儀などあらばこそ、その言葉に飛びついて、命乞いをするところであらう。事実、これは七、八月合併号にも記したところであるが、猪俣の近平則綱などは、平家方の剛力越中の前司盛俊に組み敷かれたとき、

「助けさせ給え、助けさせ給へ」

と掻き口説き、掻き口説いたばかりか、その命乞いを入れて則綱を助けた盛俊が油断した一瞬、卑怯にも逆にその命の恩人の首を取り、太刀の先に貫いて差し上げて声高く己の功名を呼ばわり、褒賞に与っている。

だが、この平家の公達とおぼしい若武者は、お助けしたいという直実の言葉に纏わり付くことも、命乞いをすることもなかった。

彼は直実に名乗りを求め、そしてそれを聞くところなのである。

「さすれば、汝にとつて私はよい敵ぞ。汝に對して私は名乗るまい。今、私が名乗らぬからといって、いつまでも誰であるか判らぬことはなからう。首実驗のとき、たやすく知れようぞ。急ぎ首を取れ」

若武者は直実との身分が余りに違ふため、平家の公達の誇りとして、自分の身分を今あえて明かすことを拒んだのである。その時代、自分にふさわしくない敵を相手にすること

は、潔いこととはされなかったのだ。

「さすれば、汝にとって私はよい敵ぞ……急ぎ首を取れ」この言葉のうちに、自分の命を助けようとした直実のやさしい心情に感じて、潔く討たれ、彼に功名を立てさせてやりたいという、若武者の思いがこめられている。

直実の岸辺からの呼び声に応えて、渚に戻ってきた若武者は、卑屈に命乞いをしたり泣き言をいったりすることなく、平家の公達の誇りを持って、ここで首切られ、そして自分の命を助けようとした直実に、功名を立てさせてやろうとしたのである。

「ああ、わが子小次郎と同じ年頃とはいえ、なんとあっぱれな大將軍であらう。今、このお方を討たないからといって、勝つはずの合戦に源氏が負けるといふこともなければ、このお方をお討ちしたからといって、それで源氏が勝つというものでもあるまい」けなげな

凛々しい若武者の心に感じて、直実はどうしても彼を助けなくなった。

（何としてもお助け申し上げたいものだ）

そう思った直実は、うしろをきつと振り返った。

と、うしろからは、土肥次郎実平と梶原平三景時に率いられた源氏の勢五十騎ばかりがこちらに向かつて、砂埃をあげながら駆けてくるではないか。

（二十）

（あゝ、無念や）

直実の心に悲しみがどっと押し寄せた、と思ふや、涙が滝のように溢れてきた。

滴り落ちる涙をのこいもせず、彼はいった。

「お助け申し上げたいとは存じましたけれども、源氏の軍勢がうしろから雲霞のように押し寄せてまいりました。私がお助け申し上げましても、これではとても逃げおおせになる

ことは出来ずまい。同じことならば、この私がお討ち申し上げて、のちのちのご供養をいたしましょう」

「ただ早く首を取れ」若武者がいった。

直実はあまりにいとしくて、どこに刀をたてたらよいかわからからず、涙で目もくれ、心も消えはてて、前後不覚の有様であったが、うしろから源氏の軍勢が駆け寄る音が近づいてくる中、遂に若武者の首を掻き切った。

心ならずも首を討ち取った直実はそれを手にしたまま、鎧の袖を顔に押し当てて、

（あ、弓矢とる身ほど口惜しいものはない。武芸の家に生まれなかったならば、こんな悲しい目に出会うことはなかったものを。情けなくも御首を討ってしまったことだ）

と泣きに泣き、やがてその首を包もうとして若武者の鎧直垂をといてみると、錦の袋に入れた笛を鎧のすきまの引合せに挿している。それを見るや、直実の目からふたたびと

と涙があふれ出た。

（おいたわしいことよ。今朝早暁、われらが一の谷の先陣をしたとき、城中から管弦の音が聞えてきたけれども、あのときの笛の音はこのお方でいらつしたのだ。現在、東国からのほつてきた味方の侍たち、幾千万かいようけれども、殺戮の道具に心を使いこそすれ、合戦の場に笛をもつてくる者など誰ひとりとしておりはすまい。何といつても、ご身分のある方は優雅でみやびな心をお持ちなことだ）

戦場で立派な敵を討ち取ったときは、素手で持つことは非礼とされ、鎧直垂をといてそれを包むのが通例であった。

そこで直実も泣く泣く血の滴る若武者の首を、身に着けていた絢爛たる直垂で包み、義経のもとに持参してその見参に入れた。

「私が名乗らずとも、首を取って人に訊ねたならば、すぐに判るであろう」と若武者が直



実にいつていたとおり、その名はすぐに知れた。

清盛の弟で修理大夫経盛の第三子、無官大夫敦盛十七歳。宮廷では若年ながら笛の名手として知られた貴公子であった。

男泣きに泣きながら、そこにいたるまでの一部始終を語る直実の言葉に、義経もまた鎧の袖を顔にあてて泣いている。彼は情けを解する大将であった。

「つきましては」語り終わった直実は涙でぬれた顔を上げると義経にいった。

「敦盛殿はわが子小次郎と同じ年頃。宇治川の合戦のとき、小次郎は軽傷を負いましたが、軽傷を負ってさえ親の心はいたく悲しみました。してみれば、わが子を亡くされた経盛殿の御悲しみはいかばかりかと思ひやられます。ご子息敦盛殿が身に着けておられた鎧直垂をはじめご遺品の一切を、私の文にそえて平家の御船まで家人にお届けさせようと存じ

ますが、お許しを賜りとう存じます」

「それは敦盛殿の供養にもなろう。汝の思うところをいたせ」義経はいった。

(二十一)

直実は敦盛の父経盛に、心をこめた文を認めた。

「直実、謹んで申し上げます。はからずも戦いのさなか、ご子息敦盛殿に遭遇いたしました。私は仇敵と戦うを得た心で、心中、怒りにあふれ、ただちに雌雄を決しようと挑みかけた折も折り、ご子息のお顔をみるや、突然怨敵の思いを忘れ、たちどころに、武勇にはやる心を全く捨て去って、かえって守護し奉らんとお願いが心に満ち溢れました。

ところがそのとき、源氏の軍勢が雲霞のように襲い来たり、あたかも風が吹き過ぎて花を散らすときのようなのです。

であれば、たとえこの直実が源氏を裏切り、

平家に味方したとしても、あちらは大勢、こちらは無勢です。いかな豪勇といえどもあの大勢にはかないますまい。

ここに直実、たまたま弓馬の家に生を享け、武略を一の谷の戦いにめぐらして、平家を屈服させて天下無双の武名を獲得しはいたしましたものの、殺到してくる源氏の軍勢には、とてもかないません。

なまじいに味方に対して弓を引き、矢を放ち、剣を抜き、楯をつき、命を味方の東国武士たちに奪われて、汚名を西海の波に流すこと、家の名誉を失うことになります。

さらにまた、ご子息の本来のご意向をお尋ねいたしましたところ、御命をこの直実に下し賜り、わが冥福を祈って供養いたせ、とのお気持ちをしきりに仰せくださいました。そこで思わず、落涙をおさえながら、御首を頂戴してしまいました。

恨めしく、痛ましく、この君と私はこうして怨縁を結んでしまうことになりました。

嘆かしく、悲しく、私たちは前世からの因縁はなはだ深く、仇敵として殺し申し上げてしまいました。

しかし、よくよく考えてみますと、これは仏道に入る機縁になるのではないでしょう。か。どうしてこれが、互いにこの憂き世の苦界の縁を断ち切って、極楽では一つ蓮の身とならないことがありますか。

それゆえ、そのときが来れば、私はひとり静かに庵を結び、よろしく敦盛殿の御菩提を弔い奉るつもりでございます。私のこの言葉の真偽は今はまだ証明できませんが、後日必ず人々の知るところとなるでしょう」

認め終わって筆をおいたとき、直実の胸にふと、京で、乱世を救う聖者として耳にした法然上人の名があざやかに浮かんできた。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●私

〈特選〉そぞろ寒私物まとめておりにけり

安西 時英

この題はむずかしかったようで、無理にく
つめたようなのが目についた。この句は定
年退職が間近に迫っているという設定だろう
か。机の引き出しやら更衣ロッカーやら、あ
れこれと私物まとめているのである。

〈佳作〉私書箱の封簡重し秋日和 河合富美枝

このごろはいつでも私人神の留守 望月 展明

「私です」萩の中より園児の声 伊藤寿美子

●インク

〈特選〉五線譜にインクの染みやそぞろ寒

河合富美枝

この頃はボールペンがほとんどで、これは
にじまないから万年筆だろう。とすると、若
い頃には書き入れた楽譜だろうか。季語との取

り合わせをどう読みとるかである。助詞「に」は「の」とするところだろう。

〈佳作〉

秋灯やインクの匂う新刊書

周東 澄枝

撫子花や母の遺愛のインク壺

中島富士子

掲示板インク滲ます通り雨

浜口 佳春

●自由題

〈特選〉

放流の稚魚秋潮にすぐ馴染む

石原

新

ある程度大きくなるまで育てたあと、海に流すか、大きな網を張り巡らした中に放すかだが、これはどちらとも言わないし、魚の名も分からない。放流した魚がすぐ潮になじんで行ったというところを見ればよいのだ。

〈佳作〉

数珠確かここの抽出そぞろ寒

内藤 隼人

露草に注ぐ手向けの余り水

園田 郁子

綾線の切り絵の如し秋夕焼け

西井 正



森中自由題

⑤季語ではありません

浄土誌上旬会のお知らせ

参加作品

編集部選

私

足袋替えて公私の別の生活かな
はがきレター五十円の私信春を呼ぶ
落點や私服の僧も車座に

金谷 友江

山本美代子
佐藤 雅子

《私》は一字下げで雪だより

片桐てい女

紅葉狩り私鉄沿線染まりゆく

大場 清

私鉄バス人詰めこんで紅葉狩

浜口 佳春

「私事です」書き出す文や秋灯

周東 澄江

インク

芒の絵インクの上に色筆を

今井 恵子

締切・二〇〇四年十二月二十日
発表・『浄土』二〇〇五年二・三月合併号

選者・増田河郎子（『南風』主筆）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上旬会係

月白や机上にペン皿インク壺
年越や父の残せしインク立て
朝刊のインクの匂い秋うらら

片桐てい女
大場 清

自由題

伊藤寿美子

非常口赤く灯して虫鳴けり

島谷ときを

板の間に冬瓜転がる峽の宿

谷 しげ子

こだはりの解けて連山秋澄めり

河合富美枝

天平の雅業や秋の夜澄みませる

金谷 友江

男衆の目当ては灘の新ばしり

片桐てい女

この辺り木犀並木略図書く

中島富士子

風に色なき墓所に来て燭かな

佐藤 雅子

コスモスを一鉢買いて心足る

山本美代子

古峯の神楽の楚楚と九月かな

嶋田喜代子

乱れ萩枯り庭師の去りにけり

周東 澄江

暖かき絨緞敷きて秋深む

今井 恵子

秋草と芝に咲きいる返り花

中島 一子

向きをかえ品格のつく鉢の菊

東 保

割箸を口で裂きいる花野かな

井村 善也

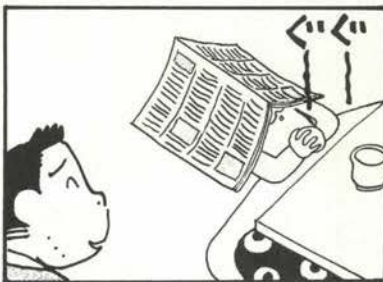
水道のホースが這いぬ菊の園

池田 伊吹

さっちゃんね

16 かい目 

かまちのしろう



編集後記

悲しみが画面こぼれる年の暮れ 岱潤

本誌『浄土』が創刊された年は、昭和一〇年です。この年三月に当時の浄土宗教学部長であった中村辨康師（現猊下尊父）と、大正大学教授であった真野正順師（当会代表尊父）が中心となつて立ち上げた法然上人鑽仰会の機関誌として、五月に創刊されています。

両師はこの時五一歳と四三歳であつたと思われまふ。そして後に三佐藤と呼ばれた佐藤賢順師（当時三六歳）や、佐藤密雄師（当時三四歳）、佐藤良智師（当時三二歳）と共に編集をされ、法然上人のみ教えの教化のために、邁進されました。

この昭和一〇年という年は、五・一五

事件の三年後、二・二六事件の一年前に当たります。ドイツでは前年ヒトラーが総統となり、この年に再武装宣言を発しています。まさに世界中が戦争に向つていた時代です。この一触即発の時代、暗雲立ちこめていた時代の中で、人々の心の支えになるのは、法然上人のみ教え以外にはないとして編集されていた雑誌が、まさに『浄土』だったのです。

真野正順師は昭和三七年一月二九日、世壽七〇歳でお亡くなりになり今年四三回忌になります。創刊以来七〇年本誌『浄土』が続いてきた背景には、この真野忌に毎年集まる方々の寄付に因るところが大きいと伺っています。その遺徳の大きさは測りしれません。（長）

雑誌『浄土』
特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正（目黒・祐天寺）
大田秀三（大本山清浄華院）
佐藤孝雄（鎌倉・高德院）
佐藤成順（品川・願行寺）
佐藤良純（小石川・光円寺）
須藤隆仙（函館・称名寺）
袖山榮眞（長野・十念寺）
高口恭行（大阪・一心寺）
中島真成（青山・梅窓院）
中村眞道（仙台・愚鈍院）
樋口隆信（石巻・西光寺）
藤田得三（鴻巣・勝願寺）
真野龍海（芝・天光院）
宮林昭彦（大本山光明寺）
宮林雄彦（横浜・大光院）
山田和雄（諏訪・貞松院）

敬称略・五十音順

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

編集顧問

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

大室了皓

浄土

七十巻十二月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十六年十一月二十日

発行 平成十六年十二月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三（二五七八）六九四七

FAX 〇三（二五七八）七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二二七



昭和62年1月号



昭和62年2月号



昭和62年3月号



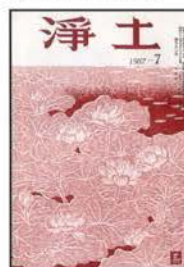
昭和62年4月号



昭和62年5月号



昭和62年6月号



昭和62年7月号



昭和62年8月号



昭和62年9月号



昭和62年10月号



昭和62年11月号



昭和62年12月号



昭和63年1月号



昭和63年2月号



昭和63年3月号



昭和63年4月号

法然上人鑽仰会の

本



※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)

「選擇集絵解き物語」含む

20,000円 (別途梱包料300円)

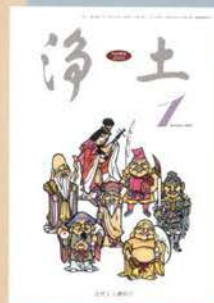


「差出人は法然さん」

600円



月刊「浄土」
バックナンバー



「法然上人絵伝絵葉書」

(8枚セット) 800円



委託販売

増補版「浄土への道
法然上人法語抄」
1,000円



「ブッダ
知れば知るほど」
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊「浄土」を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036